

個が問いをもてる社会科の授業づくり

— 地域教材（資料・事実・人）との出会いを通して —

竹岡 祥子¹

小学校社会科において、問いをもつためには、児童が身近な地域（社会的事象）に目を向け、そのよさを知り、興味・関心を育むことが重要であると考えた。本研究では、児童が自らの問いをもてるようにするために、地域教材（資料・事実・人）との出会いを工夫することで、個が問いをもつための有効な手立てとなるのかを検証した。

はじめに

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016 以下、「答申」という）では、小学校社会科の課題として「課題を追究したり解決したりする（中略）授業が十分に行われていない」ことを指摘している。具体的には、「課題把握」「問い（課題）の設定」「課題解決に向けた構想」により、社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動の充実が求められている。さらに『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（中央教育審議会 2021）では、個々の児童の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げる「学習の個性化」の必要性が指摘されている。

そこで、児童一人ひとりが、社会的事象に対して興味・関心を向け、その学びを自覚し、見通しをもって取り組む力を育むことが重要と考えた。これらの実現のために、児童と地域教材との出会いに着目し、児童自らが個の問いをもち社会的事象と関わることができるよう導く授業づくりを追究することが、社会科の課題解決の一助になると考えた。

研究の目的

社会科入門期の3年生が、地域へ興味・関心を向け、一人ひとりが個の問いをもちながら、学びを深める社会科の授業において、問いの様相を分析し、地域教材との出会いの工夫の有効性を検証する。

研究の内容

1 研究の背景

(1) 所属校の実態から

学校教育目標は「自然や地域・社会と共に 学び合い高め合う 心豊かで健やかな児童の育成」（酒匂小学校 2022）である。自分の住む地域を知り、地域

1 小田原市立酒匂小学校 教諭

の一員としての自覚をもち、地域への関わり方を児童自身が判断・選択していくことと結び付いている。

ところが、所属校教員への聞き取り調査では、授業に地域教材は取り入れやすいが、「人材や社会的事象を取り入れた授業の計画が立てづらい」「コロナ禍による活動制限」などに課題があった。

児童対象の調査では、「社会科が好き」と回答した児童は、95%以上だった。また、「好き」な理由（自由記述）として、主に地域の店の人にインタビューしたり、家族も知らないことを知り、家で話すのを楽しみにしたりすることを挙げている。身近な地域について体験を通して実感を伴いながら理解することを経て、好きという思いがうまれていることがわかった。

(2) 地域教材の必要性

学習指導要領の中学年の目標では、「地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う」（文部科学省 2017 pp.11-12）とある。加えて、内容の取扱いについての配慮事項として、「各学校においては、地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにする」（同 p.141）と明記されている。児童が何気なく生活している地域を教材化する利点は、そこへ何度も足を運び確かめることができ、自分の生活と結び付けて考えやすいことである。3年生は、前年の生活科で地域をいかした学習活動を展開しており、地域教材は関心をもちやすい。さらに、西川（2022）は「現実の社会的事象を教材とする社会科は、児童生徒の社会的事象に対する思いや考えも教材となる」と述べている。「発見」や「疑問」などで地域との接点を作り単元構想にいかすことで、地域社会の一員としての自覚を養うことにつながられる。

(3) 個の問い

ここでは、近藤（2014）の「一人ひとりの子どもが創り出すものとしての『問い』」を参考に問いをもつことができる授業を構想する。田爪（2019）は「子ども自身が自分の学びの姿を理解しながら、自ら学びを進めることが重要」とし「自己調整力」の必要性を述べている。児童が問いをもったと自覚するために、自

己の振り返りを大切にしていける。児童の発した問いに教員が丁寧に価値付ける支援により、自己の問いの価値に気付き、さらに自身の学びのよさを自覚できるようにしていく。

2 研究の仮説

社会科入門期において身近な地域教材（資料・事実・人）との出会いを工夫すれば、児童が個の問いをもつことができるだろう。

3 仮説に関わる手立て

本研究の問いの定義は、次のとおりである。

社会的事象に出会ったときの発見や疑問を一人ひとりの「問い」とする。（例）「なんだこれは！」「どのように使うの？」

(1) 地域教材との出会いについて

児童が、問いをもち、主体的に社会的事象と関わるために「なぜだろう」「知りたい」と興味・関心をもてるような三つの地域教材との出会いを設定する。次の視点で教材化し、出会いを工夫する（表1）。

表1 地域教材との出会いについて

資料との出会い	事実を確かめる出会い	人との出会い
・意外性 ・ずれが生じる ・自分の常識と違う など	・可視化 ・何気なく見ている など	・その人の思い、願い ・その人の苦勞、苦心 ・感動や憧れ など

(2) 問いをもつための手立て

ア 親しみやすい言葉を用いる

問いは授業において、なぜだろうを「？（はてな）」とし、驚きや発見を「！（びっくり）」と表現する。これらを解決しようとする目的意識をもつことで、「調べてみたい」「伝えたい」などの段階に進めるようにする。

イ ワークシートに書くことで意識付ける

ワークシートには、「知りたい」「なぜだろう」というような具体的な問いと調べてわかったことなどを記述する。1枚のワークシートに一つの問いを書くようにする。

ウ 学習カードで自己の振り返りを行う

児童が自らの学びを自覚したり、見直しをもったりするために振り返りをする。学習カードは、自己調整を行うための視点（①「問い」の自覚、②③解決の自覚）で4件法による評価を行う。記述欄には、「問い」「解決への気付き」「達成感」などを書くように促す。

4 検証方法

仮説を基に、質問紙調査及び検証授業を行い、次の方法でデータを収集した。

(1) 質問紙調査

「好き」と感じる要素を分析し、質問紙調査をすることで、社会的事象への興味・関心を知るための手立てとすることができると考えた。「好き」を表す概念を構成する要素は、福谷ら（2021）の「社会科学習動機づけ尺度」を参考に「意欲」「把握」「有用性」「必要感」に大別した（表2）。

事前・事後調査の結果を比較して、児童の社会科に対する意欲と単元で扱う社会的事象の把握の広がり进行分析・考察する。なお、研究では、3学年、一単元の扱いのため、「意欲」「把握」に絞った。

表2 「好き」を表す概念を構成する要素と事前・事後アンケート項目

好きを表す概念	意欲	もっとやりたい 「問い」をもっている 【質問①】社会科では、いつも？（はてな）や！（びっくり）をもつことができる 【質問②】学校で社会科をもっと勉強したい
	把握	知ることが楽しい 知っていることがある 【質問③】安全を守ることを知っている
	有用性	家の人に話したくなる
	必要感	普段の生活に役に立つ

(2) ワークシートと学習カードの自己評価と記述

振り返りのための学習カード（4件法）とワークシートの記述から児童の変容を分析・考察する。

5 検証授業

【期 間】令和4年9月21日（水）～10月18日（火）

【対 象】小田原市立酒匂小学校

第3学年2クラス（45名）

【単元名】まちを火事から守るくふうを見つけよう

【時 数】9時間

(1) 単元について

本単元は、全9時間3次構成となっている（表3）。児童が興味・関心をもって社会的事象と関わり、問いをもてるようにすることをねらいとし、三つの地域教材との出会いを設定した。また、個が問いをもてるようにするための支援は、①児童が記述した問いへの肯定的なフィードバック ②見学（個）から、まとめ（学級全体）までの学習の流れを意識した単元の構成 ③まとめでの板書の構造化・教室掲示とした。

ア 資料『消防年報2022』（小田原市消防本部 2022）

『消防年報2022』によると、消防車の出場（火災・誤認・救助等）は、訓練等を除いて3,106回、通報から消火活動開始までの時間は15～25分程度とされている。一方、全焼件数は8件であり、出場回数と比べ、ずれがある。それにより「全焼の火事を起こさないための秘密があるはずだ」と、単元を貫くめあてを設定し、学習の見直しをもてるようにした。

イ 地域（学区）消防設備調べ（フィールドワーク）

児童にとって地域の消防設備は、身近にあってもその存在に気付いていないものに当たるだろう。事前学

表3 単元指導計画

次 時 日	第1次		第2次			第3次			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
日	9/21	9/26		9/29	10/3	10/5	10/13		10/18
出 会 い	資料との出会い クイズ・写真 消防年報 2022 消防設備写真	事実を確かめる出会い フィールドワーク (学区) 消防設備 消防団見学の予告			人との出会い① 消防施設見学・取材 (学区) 小田原消防第17分団 消防団員		人との出会い② 消防施設見学・取材 (小田原市) 小田原消防本部 消防士		
目 標	「消防年報 2022」で具体的な火災件数を知り、学習の見通しをもつことができる	地域 (学区) の消防設備を調べ、消防設備の役割を知ることができる			学区の消防施設である消防団を調べ、消防団の役割を知ることができる		消防署の施設を見学し、様々な取組や工夫を知ることができる		今の自分にできそうなことを考えることができる
学 習 活 動	・「消防年報 2022」を基に小田原市の消防に関わる調べ学習の見通しをもつ ・消防設備写真から、自分が調べてみたいことを考える	・学校周辺の消防設備を探す ・探してきた設備を共有し、学区の消防設備はどのようなものがあるのか大型地図にまとめることで、理解する ・消防団に携わる人を予告で知る			・消防団の倉庫を調べる ・消防団員へインタビューする ・調べてきたことを学級でまとめ、学区の消防設備はどのようなものがあるのかを理解する		・消防署を見学する ・消防士へインタビューする ・小田原の消防の仕組みについて理解する		・今までの学習を振り返り、まちを火事から守る様々な取組や工夫を確認する ・今の自分にできそうなことを考える

習では、通学路にある消防設備の写真資料を提示することで、問いがもちやすくなる考えた。まず、写真の消防設備を探すことで、自分の身の回りにたくさんの消防設備があることを気付けるようにする。さらに、自分の問いを自分で確かめることは、実感を伴いながら理解するよさにつながる。また、事後学習ではフィールドワークの成果を皆で大型地図にまとめ、地図を作る達成感も味わえる授業展開にした。

ウ 消防団・消防署への見学・取材

消防団・消防署の見学と、その役割に携わる人への取材を行う。消防設備を調べてわからなかったことを専門家に聞くという体験を通して、活動の意味やその人の思いを直に感じ取れるようにした。学びの場を地域の消防団から小田原市の消防署へと発展させ、児童の視野を徐々に広げることで、問いがもちやすくなる考えた。

6 検証結果の分析と考察

(1) 児童は、問いをもてたのか

ア 三つの出会いの工夫から

(ア) 資料との出会い

地域の『消防年報 2022』を基に消防車の出場件数などを3択クイズ形式で提示した。児童は、これらから単元を貫くめあてを立てることができた。そして「消防士さんが早く駆け付けて火を消しているのかもしれない」「パトロールをしているのではないかと予想し、消防士に思いを寄せている児童が多かった。しかし、児童は「消防の仕事をする人＝消防士」という印象が強く、個の問いを立てるには至らなかった。

(イ) 事実を確かめる出会い

フィールドワークの前に、学区の消防設備の写真を複数提示したことで、児童は「そういえば見たことがある」「〇〇の近くではないか」などつぶやき、具体的な場所を想起していた。消防設備探しに加えて、「何個」「どこに」などの個の問いをもてたので、明確な活動のめあてができた。さらに、消防設備探して児童は、保護者ボランティアの力を借りて、「細い道」「家が多い」「広い道路」などの周囲の様子を観察し

た。それが、大型地図にまとめる際に「可視化」の役に立った。また、大型地図は、話し合うときの根拠となり、教室に掲示しておくことで活動を振り返る手作り地域資料として活用できた。

地域に出て事実を確かめたことから、「その場で解決しきれなかったこと」「見えてきたからこそ新たなはてな」が次の問いになった。さらに、教員が人との出会いを予告したことで新たな問いも生まれた。次はその役割に携わる専門的な知識がある人に、詳しく話を聞きたいという気持ちが高まった。

(ウ) 人との出会い

a 消防団との出会い

まず、学校の前にある身近な地域消防団員に、活動の様子や設備についての話を聞いた。消防団という特別な役割がある人と出会い、普段は見られない詰所の見学や消火栓を開けてもらえた場面では、わくわくした様子で覗き込んでいる児童が多かった。そして、消防署との関係聞き、地域を守ることは、消防士だけの役割ではないことを知った。学習カードには「普段は違う仕事をしていることがわかった」「そういえば、防波堤で見かけたことがある」などの記述があった。また、消防団の取材で全て解決できないことを実感した児童もいた。これらが、「火事が少ない秘密は、消防士さんの工夫があるからだ」という単元を貫くめあてにつながり、新たな問いを立てることに役立った。

b 消防署での出会い

消防団との出会いで、消防士に会いたいという思いがますます高まり、全員が解決したい問いをもち小田原消防本部へ出掛けた。実際に出動の様子を見たことで児童の意欲が高まった。庁舎では、着装室や消防車両の工夫を体感した。児童は、「家が多い所は、やっぱり消火器が多い」と調べたことを確かめたり、救助活動の苦勞を聞いたりし、消防士に思いを寄せていた。

イ 児童の変容から

児童A (以下、Aという) の様子から問いの変容を考察する。Aは、一時間目の振り返りで、人的被害はどうだったかと記述した。また、消防設備調べでは、「(何がどこにあるのか) とりあえず見に行く」と漠

然とした問いを立てた（表4）。

表4 児童Aの問いの変容と単元の振り返り

出会い	問い
資料	全焼が8件でよかったな。でも「火事で死んじゃった人はどのくらいいるのだろう」と思って怖いです。
事実を確かめる	・(何がどこにあるのか) とりあえず見に行く
消防団	・なぜ火事が起きたら煙が出るのか ・消防団の人は近所だけですか
消防署	・消防士と警察は、本当につながっているのか
単元の振り返り なるべく火事の場所から離れている電話ボックスで通報する。 迷子になりそうなくらいに遠かったら、近くの知っている場所に逃げる。近すぎるのもだめ。人の話をちゃんと聞く。	

単元のまとめでは、教員の「今の自分たちができることを考えよう」という問いかけに、はじめは「できない」と即座に反応した。しかし、「できることがあるかも」という他の児童の声から全体的な学習を振り返り、周りの考えを聞くことで「自分は声が大きいかから人を呼べる」と気づき、考えを変えた。Aには、火事は恐ろしいものという思いが一貫してある。消防施設調べのまとめで、電話ボックスで通報できることを知り、地図を基に家からの距離を考え始めた。消防署見学では、消防署と関係機関の連携について関心を示した。単元の振り返りでは、火元との距離を考えながら通報することと命を守ることができそうなことと考えた。具体的な問いをもって活動したことで、考えが深まったことがわかった。

ウ 学習カードの自己評価・ワークシートから

児童の意欲が高まった場面について、学習カードの振り返りにおける自己評価の変化の推移を調べた。「知りたいことはわかりました」の項目では、消防署見学で自己評価を上げた児童が全体の35%と前時と比べて大きく上昇した。反面、まとめの自己評価は、前時と比べ、いずれも下がった（図1）。

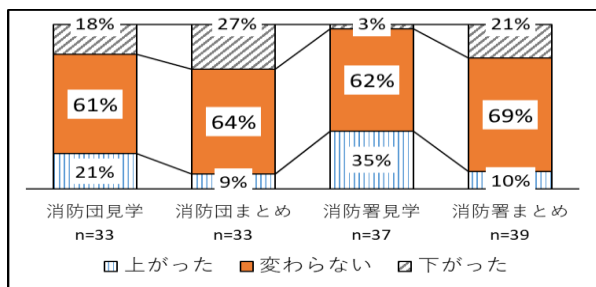


図1 「知りたいことはわかりましたか」自己評価の推移

これは、解決しなかった問いやまとめから生じた新たな疑問が児童にあり、わからなかったことが意識化されたものであると、学習カードの記述から読み取ることができた。まとめの授業では、体験的活動を基に関係機関のつながりや意味を考えるなど、思考を働かせる活動が多い。このように体験から思考への活動を繰り返すことで、個が問いを立てやすくなった。

また、「?・!をもつことができましたか」の項目

の消防署見学で、自己評価を上げた児童が全体の25%と上昇した。さらに、変わらないという評価の内訳において児童は、問いをもつという肯定的な評価をしている。つまり、92%の児童が個の問いをもって学習に臨んだ自覚があったことが読み取れる（図2）。

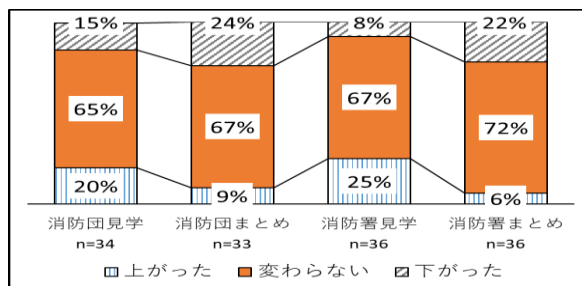


図2 「?・!をもつことができましたか」自己評価の推移

ここで、消防署見学で意欲が下がったと自己評価した児童が8%いたことに注目したい。これには、次のような理由が、見学の様子から見取ることができた。ある児童は見学で集めた多くの情報を一人では整理しきれなくなっていた。また、問いのワークシートを複数書いて見学した児童は、自分の問いに対してわかったことをカードに書くまでに至らなかった。

消防団と消防署それぞれの見学におけるワークシートの問いの数を比べると1.4倍に増加した。問いをもって消防士に話を聞きたいという思いの高まりが表れている。しかし、問いの数が増えた一方で、解決した問いの数はほぼ同数であった（表5）。ここから、発達段階的に全ての情報を一人では解決しきれないこと、確かめたい問いが見学やまとめを経て、自然に精査されたことがうかがえる。

表5 ワークシートの数の比較

	枚数	解決した枚数
消防団見学	71	59
消防署見学	99	60

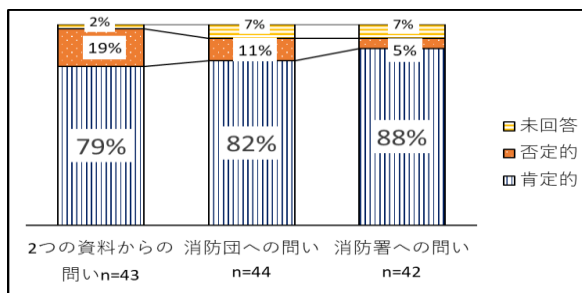


図3 三つの場面の「?・!をもつことができましたか」への回答の比較

それぞれの出会いをし、自分の問いを書いた日の学習カード「?・!をもつことができましたか」では、問いをもつと自覚した児童が増えた（図3）。

児童は、調べたことを学級でまとめる活動を通して、情報を整理し、事象同士を関連付けて考え、さらなる問いをもつことができた。その際、教員の「何がわかったか」「つまり〇〇とは」などの問いかけや発表内

容を順序立てて提示する工夫が、児童の理解の向上に役立つことがわかった。

エ 事前・事後アンケートの結果から

事前・事後アンケートでは「?・!をもつことができる」という項目で、全体を通して肯定的な回答を維持している(図4)。

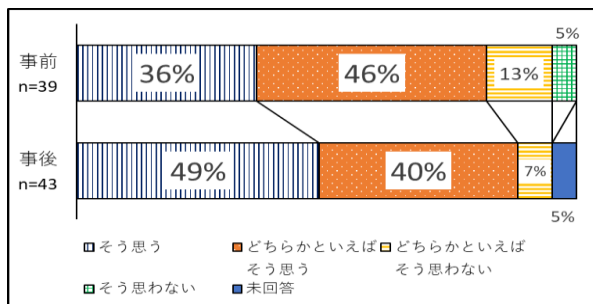


図4 「?・!をもつことができる」のアンケートの回答の比較

さらに肯定的な回答の内訳では、「そう思う」と十分な満足を感じている児童が36%から49%に増加している。この変化から、三つの出会いは、児童の社会的事象への興味・関心を引き出し、個が問いをもつことに有効な手立てであったと考える。

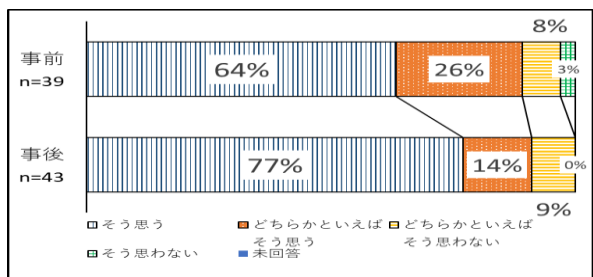


図5 「学校で社会科をもっと勉強したい」のアンケートの回答の比較

「学校で社会科をもっと勉強したい」という項目では、肯定的な回答の変化はほとんど見られなかったが、「そう思う」の回答は64%から77%に向上し、学校で社会科を学ぶ意欲が高まった(図5)。しかし、「そう思わない」の回答は、事後0%に減少したものの、「どちらかといえばそう思わない」の回答は9%であった。否定的な回答の割合はほぼ変化がなく、そのように回答したのは、事前・事後アンケートとも同じ児童だった。今後も興味・関心をもてるような学習を継続することで、児童を支援していくことが望ましい。

(2) 問いの変化

問いを解決し、新たな問いが生まれた過程では、その質に変化が見られた。児童の問いを「答申」の別添3-5より、視点をいかした問いの例と本単元の評価規準を参考に分類した(表6)。「何個」「どこに」という問いから、「なぜそこにあるのか」「誰が使うのか」などの意味を考える問いや「消防団とは何か」などの役割を意識した問いが増え、自分の身の回りへ視野が広がっていることがわかった。調べてわからな

かったことへの問いに加え、119番通報や現場に早く駆け付けける仕組みに関わるものへの問いが増えている。

消防団員から直に話を聞いたことは、問いの内容の広がりにつながった。例えば「消防士は仕事なので、日常はどのように過ごしているのか」「火事を防ぐ

表6 学習カードとワークシートの問いの変化

主な記述	出現数	
	消防施設調べ 教員の予告	消防団見学 まとめ
調べたことに関わるもの (消火器・消火栓など)	65	39
人に関わるもの (消防団員・消防士)	5	7
仕組みに関わるもの (役割など)	7	27
消防車に関わるもの		22
その他	3	3

ためにパトロールをしているのか」「消防団員は酒匂では30人。小田原市内の消防士は1000人くらいではないか」などである。消防団の見学が基になり、知りたいことがより具体的になった。このことから、問いの広がりがわかる。このような問いの変化は、学びの充実につながったと言えるだろう。

(3) 個の学びから

問いのもち方は、個によって違うこともわかった。学級で考えることによって、価値のある問いかどうかを考え始めるきっかけとなっている。自分が考えた問いを調べたり、友だちの話を聴いたりしていくうちに、解決・精査する姿が見られた。

児童B(以下、Bという)は、消防署でわかったことを確かめる際「消防車が8台もありました」と発言した。この「も」には、資料との出会いで市内の消防車が19台と紹介されたことから、「8台は多い」というBの予測が含まれている。そこから、「そうだった」「19台のうちの8台って大体半分だね!」「消防署は5つあるんだよね」「ここに8台って多くない?」とつぶやく児童がいた。何気なく使っている言葉を教員が取り上げたことで、Bの発言から他の児童たちは数に注目し、小田原市全体へ視野を広げることができた。

児童Cは、消防団見学の予告で「消防団とは何か」「分団長さんは、普段何をしているのか」という問いを立てた(9/29)。見学当日の学習カードの「?・!をもつことができましたか」の振り返りでは、自己評価を問いを立てた日の2(どちらかといえばそう思わない)から1(そう思わない)としている(10/3)。また、ワークシートに記述は少なかった。次時のまとめでは、「山火事に関係している」と発言し、友だちの発言にも「そうだった!」「本当?」と反応していた。ワークシートには記述を付け足し、自己評価も上げている(10/5)(表7)。

表7 「?・!はもつことができましたか」児童Cの自己評価の変容(4件法・4「そう思う」1「そう思わない」)()内は前時からの変化

9/21	9/26	9/29	10/3	10/5	10/13	10/18
4	欠席	2	1(↓)	3(↑)	4(↑)	4(↑)

このことから、見学当日は本人の中で情報があふれてしまったと考えられる。情報のまとめの時間で整理し理解を深め、自分が見知ったことに意味付けができたのだろう。体験によって印象付けられたことが共有の場で価値付けされ、意味理解につながっていることがわかる。その後の消防署への問いは、単元を貫くめあてに立ち戻って考えた結果、知りたかったのはこれだったと、完結に向けて思考を働かせていた。事前・事後アンケートも、問いをもつことに対して、1（そう思わない）から4（そう思う）に評価を上げ、初めて出会うことに問いがもてるとしていった。

研究のまとめ

1 成果と課題

本研究では、児童が問い（疑問や驚き・発見など）を創り出すことをねらい、社会的事象と主体的に関われるようにした。そのために、地域教材（資料・事実・人）との出会いを工夫し提示したことは、それぞれの出会いで個が問いをもつための有効な手立てとなった。さらに、児童自らが学習に見通しをもつことにもつながっていった。

本単元では、問いの質が消防設備の存在・確認などから消防に関わる意味・役割・展望へと変化していった。それぞれの出会いを学級で共有したことで、同じ体験をしているのに感じ方が違う友だちがいることに気づき、さらに考えを広めたり深めたりすることができた。今後は、問いを解決する過程において、個の問いの広がりや深まり、解決しきれなかった問いへの次の手立てを追究していく必要があると考える。

また、資料との出会いにおいて、具体的な数値を用いた資料提示をしたが、単元の最後に全焼件数が表す意味やその背景を考える必要性を感じている。提示する資料は、単元指導計画を踏まえて慎重に吟味すべきである。

2 今後の展望

今回は資料・事実・人との出会いから問いを立てたが、身の回りに多くの素材があるので、社会科における4年間を見通し、学年の育ちに応じ常に個が問いをもつための工夫を取り入れていくことが望ましい。

筆者は、教材化のための地域取材を通して、消防に関わる様々な出会いをした。そこでの感動や視点を授業にいかし、児童と地域をつなげることができた。今後は、教材化した地域とのつながりを学校全体で共有し、いつでも誰でも利用できるような仕組みをつくっていくことで、社会科指導が充実するだろう。児童が、地域の一員として社会参画意識をもてるような指導の工夫をしていきたい。

おわりに

最後に、本研究を進めるにあたり、検証授業に全面的に御協力いただいた小田原市立酒匂小学校の児童・保護者・教職員の皆様、小田原消防団第17分団の皆様、小田原消防本部の皆様に深く感謝申し上げます。

[指導担当者]

加藤 舞² 大澤 ひかる² 大塚 潤子³

引用文献

- 小田原市立酒匂小学校 2022 「令和4年度 酒匂小学校 グランドデザイン」
- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」 pp.132-133 別添3-6
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuko00/toushin/1380731.htm (2022年12月15日取得)
- 中央教育審議会 2021 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」 p.17
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuko03/079/sonota/1412985_00002.htm (2022年12月1日取得)
- 文部科学省 2017 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』（日本文教出版） pp.11-12 p.141
- 近藤真 2014 「小学校社会科授業における問いの創出とその様相―抽出児童の問いに着目しながら授業を再構成することを通して―」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.121 p.52
- 田爪宏二 2019 「『自己調整力』をどう見取るか」（教職研修 6月号 教育開発研究所） p.93
- 西川健二 2022 「採用側からみた教師教育と社会科の役割」日本社会科教育学会（編）『教科専門性をはぐくむ教師教育』（東信堂） p.115

参考文献

- 小田原市消防本部 2022 『消防年報 2022』
- 福谷泰斗・皆川直凡 2021 『自己調整学習の理論に基づく振り返り活動が中学生の学習動機づけに与える影響―ポートフォリオを導入した社会科学習プログラムの開発とその教育効果の検証―』応用教育心理学研究 第38巻 第2号 pp.47-60